
ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

【Nコード】

N4459Q

【作者名】

鮮血の刻印

【あらすじ】

高校生になりたての主人公。

彼はどこにでもいる、ごくごく普通な少年。

成績は上の下くらい、運動神経も普通。

特にこれと言って取り柄は無い。

そんな彼が、ある日家に帰ると——「おかえりなさいませ、マスター♪」——知らない女の子がいた。

「誰？」

少年は、彼女を見て第一声を発する。

展開とかを一切考えずに始めました、「擬人化小説」。

更新は不定期です。　悪しからず。

第1話 「知らない人が家に」警察に電話していいよね?」(前書き)

鮮血

「つてなわけで、擬人化マイスターと名高い、
とある先生に触発されて、書いちゃいました!」

英樹

「せめて終わり方を決めろよ……。」

鮮血

「ごめん……。」

英樹

「それより、何で俺がここに?
この作品の主人公は?」

鮮血

「まだ出さない。」

英樹

「何故?」

鮮血

「ちよつとね……。」

英樹

「キャラが定まって無いのか?」

鮮血

「理由は、2話目で明かす予定。」

英樹

「何でそうなるんだよ……。」

鮮血

「さて、更新は不定期になりそうです。
そこは予めご了承ください。」

英樹

「お願いします。」

鮮血

「それでは、『ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー』、どうぞ。」

第1話 「知らない人が家に『警察に電話していいよね?』」

「ただいまー。」

学校から帰宅し、少年は家の扉を開ける。

しかし、彼を迎える言葉は無かった。

「つて、誰もいる訳無いんだけどね。」

苦笑いし、学校の鞆を丁寧に床に置く。

洗面所に向かい、手洗いとうがいを済ませ、タオルで水滴を拭く。

「ありゃ?」

しかし、そのタオルは長い間使ってきた所為なのか、破けていた。

「あちゃー……………」

困ったもんだという風に溜息をこぼす。

「でもまあ、縫えばまだ使えるか。」

穴のあいた箇所は、さほど大きなものでも無かったので、綺麗に畳む。

そして、鞆を持って2階に上がった。

「裁縫箱は……………」

ゴソゴソと棚の下を漁り、ようやく目的の物を見つける。

「えっと……………」

タオルを引き寄せ、手慣れた手付きで穴を繕っていく。

「これで2回目、かな？」

タオルに問いかけるように呟き、しかし、修繕の手は緩めない。

「よし、これで大丈夫だな。」

綺麗に修繕されたタオルを照明にかざし、他に穴が無いか確認する。

「問題無し、と。」

それを再び綺麗に畳み、今度は鞆から筆箱を取り出す。

取り出された筆箱は、かなり古いようだった。

消しゴムを単体で収納する箇所の蓋は無くなっており、いかにも“古い”という事を強調していた。

「そろそろ削らないとなあ。」

ぼやきながら、筆箱の蓋を開ける。

それは、チャック式では無く、磁石によって、金属の部分を留めていた。

中身も古めかしくなっており、赤と黒のボールペンが1本ずつと、消しゴムが1つ。

そして、長さがバラバラの鉛筆が4本入っていた。

その内の1本を手に取り、鉛筆削りに持っていく。

「もう短いよなあ……………」

せっかく削ったというのに、その鉛筆は、持つには短かった。

「そうだ。」

それを無くさぬよう持ち歩き、引き出しからキャップを取り出す。

「これで少しは長くなる。」

鉛筆に嵌め、筆箱にしまおうとする。

「ん？」

だがその時、携帯電話が振動する。

「なんだろう?。」

鉛筆を筆箱の脇に置き、電話に出る。

「もしもし?。」

「悪いな、いきなり電話して……………」。

友人からのだと気づき、口調を柔らかくする。

「平気だよ。」

それで、どうしたの?。」

「ウチの畑で採れた野菜、少し持って行けって、親がお前の事を呼んでいるんだよ。」

「あはは……………」。

その光景が目に見え、少年は苦笑する。

「それじゃあ、今から行くよ。」

「ああ。」

電話を切り、私服に着替える。

陽が落ちたとはいえ、春になったばかりのこの時期、さほど寒くはないだろう。

玄関のドアを開け、家に施錠する。

それを確認した後、自転車が置いてある所までいく。

自転車のサドルをポンポンと叩き、スタンドを軽く蹴る。

「それじゃあ、行こうか。」

自転車に一言呟き、彼はペダルをこいだ。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー♪

第1話 「知らない人が家に」警察に電話していいよね？」

「ふう。」

ようやく帰宅した少年は、自転車を定位置に戻す。

そして、鍵を取り出して家に入る。

「ただいまー。」

いつもと同じように、何も返ってこない。

それに寂しさを覚える訳でも無く、彼は2階へと足を運んだ。

階段を上りきり、2階のリビングに続く扉を開ける。

「おかえりなさいませ。」

「うん、ただいま。」

すると、誰かが出迎えてくれた。

それに普通に返事を返し、しかし、少年は「あれ？」と思う。

ゆっくりと声がした方に顔を向けると、そこには――

「っ！？ 誰も、いない！？」

――誰もおらず、驚く。

「あの、こつちですけど……。」

と、思いきや、どうやら真逆の方を見てしまったらしい。

背後から声が聞こえてきた。

「ゴホン！」

咳払いをしてから、改めて後ろを向く。

そしてそこには、何故か“見ず知らずの女の子”がいた。

「おかえりなさいませ、マスター。」

「えっと、どちら様でしょうか？」

意味が分からず、彼は聞き返した。

第1話 「知らない人が家に」警察に電話していいよね？」 了

第1話 「知らない人が家に」警察に電話していいよね?」(後書き)

英樹

「なんとも中途半端な終わり方だな・・・。」

鮮血

「うるせえ・・・。」

英樹

「2話目、さつさと掲載しろよ?」

鮮血

「頑張ります・・・。」

英樹

「だといいんだけど・・・。」

感想、誤字脱字、お願いします。」

鮮血

「お願いします!」

第2話 「自己紹介は大切だけど、最優先は現状の説明」(前書き)

鮮血

「ほい、2話目です。」

霧明

「今回は？」

鮮血

「彼女が何者なのかが分かります。」

霧明

「擬人化って事だったら、『何物』でも間違いじゃないよな。」

鮮血

「それは置いとけ。」

霧明

「あつそ……。」

鮮血

「そんでは、第2話をどうぞ。」

第2話 「自己紹介は大切だけど、最優先は現状の説明」

「おかえりなさいませ、マスター♪」

「誰？」

上のやり取りは、少年と少女のものだ。

ニコニコと笑っている少女とは反対に、少年の方は警戒していた。

（なんなんだ、この子？

まさか、泥棒？）

しげしげと彼女の出立ちを見る。

真っ黒な髪に、それを銀のリボンでポニーテールにしており、

瞳は髪と同じように、綺麗な夜をそのまま映したような黒色をたたえていた。

衣服は萌葱色のワンピースを着ており、ソックスは無く、素足。

肌は健康的な肌色で、太腿や肩と腕など、ワンピースから覗く肌は艶めかしかった。

（そうか！）

目の前の少女に視線が釘付けだった、少年は、ある考えがよぎった。

（きっと、この子に釘付けになっている間に、

他の仲間が盗みを働いているんだ！)

そう考え、電話を手取る。

「とりあえず、警察に電話するね。」

「なんでですか!？」

少女は驚き、あわあわと両手を振って慌てる。

「どうしてって、泥棒でしょ？」

「違いますよ、マスター！」

「じゃあ、君は何者なのさ？」

訝しい視線を向け、少女に名乗らせる。

「私は、“鉛筆”です。」

「鉛筆？」

「はい」

「あの、筆記用具の？」

「そうですよ。」

「Pencilって事？」

「Yes!」

少年が（微量だが）英語で聞くと、少女は当然のように英語で返した。

「やっぱり警察に……。」「

「なんでですかー!?!」

最早何が何だか分からない。

またもあわあわと慌てだす少女。

小さい、俗に言うSDキャラにすると、可愛らしく見えてくる。

（絵師はこもわた。華さんがいいなあ。）

と、どうでもいい事をぼんやりと考える。

「あの、まずは私の話を聞いてくれませんか?」

「あ、うん。」「

受話器を持ったままの少年に、少女が話します。

「私は、マスターの“鉛筆が擬人化したもの”なんです。」「

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

第2話 「自己紹介は大切だけど、最優先は現状の説明」

「私は、マスターの“鉛筆が擬人化したもの”なんです。」

「へえー……………」

「驚かないんですか!？」

そっけない反応に、鉛筆だと名乗った少女の方が驚愕する。

「いやだって、そんな話、信用できないし……………」

「確かに、そうですね。」

それじゃあ、マスターの筆入れの傍にあった鉛筆はどこに行った
と思いますか？」

「そういえば……………」

出掛ける前に置いておいたはずの鉛筆が無くなっている。

「はっ!？」

ま、まさか、君が……………」

「そうです。

私がマスターの鉛筆……………」

「…………勝手に他人の鉛筆を食べたのか!？」

「はい、おいしく頂きました」

って、違いますよ!？ そんな訳無いじゃないですか!」

「じゃあ?」

「だから、その紛失した鉛筆が、私なんです!」

「嘘……………」

「ホントです!

しょうがないですねえ。」

溜息をつき、鉛筆は頭のリボンを解く。

すると、まばゆい光が彼女を包んだ。

「うわっ!？」

その眩しさに目を閉じ、それが止んだ頃には、その場に少女の姿は無かった。

「……………」

少年はただ呆けているだけだったが、やがて我に返る。

「なあーんだ、ただの夢か。」

「なんでそうなるんですか！」

「ハハハ」と高笑いする彼を一蹴するように、先程の鉛筆の音が聞こえる。

ふと目をやると、筆箱の脇に鉛筆があった。

「ほ、本当に擬人化したんだ……………」

「そうですってば。」

「で、どうやって人の形になるのさ？」

「私になろうと思えばなれますよ。」

「すごい自由だね……………」

あまりの自由奔放ぶりに、溜息がでる。

「他に質問は？」

いつの間にか人の形に戻った鉛筆が問う。

「たくさんあるけど。」

とりあえず、君はどうして擬人化したの？」

「マスターにお礼を言う為です。」

「お礼？」

「はい。」

マスターは、短くなった私を捨てずに、まだ使おうとしてくれました。

ですから、そのお礼を込めて、擬人化したんです。」

「別に、お礼を言われるような事じゃないと思うけど……。
じゃあ、擬人化はどんなものでもできるの？」

「いいえ。」

マスターに長い間使ってもらったり、感謝するような事が無い限りは無理ですね。」

「ふーん。」

っていうか、何で僕の事をマスターって呼ぶの？」

「私の持ち主ですから。」

まあ、確かに当然な答えだ。

「そうなんだ。」

他にも擬人化する物が、いろんな人の所に現れたりしてるの？」

「ええ。」

たーーーーーくさん、いますよ。」

長く間をあげ、大きく手を広げてジェスチャー付きで答える。

「聞いた事無いけど……………」

「まあ、この世の中で擬人化なんて、信じられませんかね。それに、それがバレて世の中に晒されるのが嫌な物もありますし。」

「だったら、君は擬人化しちゃっていいの？」

「マスターの事は、長い間傍で見てきましたからね。」

「って事は、鉛筆の頃の記憶もあるんだね？」

「はい。」

（物には九十九神が宿るって言うけど、それと似た感じなのかな。）

目の前にいる鉛筆を見ながら、そんな事を思う。

「ですが、全ての物が擬人化する訳でもありません。しない物もたくさんあります。」

「なるほど。」

そこまで話した時、鉛筆のお腹が鳴った。

「はうう／＼／＼／＼／＼／＼／＼／」

それに照れて、鉛筆はそっぽを向く。

「空腹とかにもなるんだ。」

「そうです。」

人間と同じになるんですからね。」

「じゃあ、夕飯作るよ。」

「い、いえ！」

「ここは私がやります。」

「どうして？」

「マスターのお世話をするべく、擬人化したんですから。」

「お礼を言うだけじゃないんだ。」

「はい。」

中には、メイドのようになる物もあります。」

「へえー。」

けど、君は料理とかできるの？」

「うっ……………」

肝心な事を聞かれ、鉛筆は答えに詰まる。

「じゃあ、お皿だけ並べてもらおうかな。」

「面目ないです……………」

しょんぼりとする鉛筆に、「気にしないで」と優しく声をかける。

「それじゃあ、何か食べたいのはある？」

「えっと、オムライスが食べたいです。」

「材料はあるし、大丈夫。」

冷蔵庫を確認し、少年は作り始めた。

こうして、擬人化した鉛筆と少年の生活が始まった。

「ところで、マスターのお名前が未だに紹介されてませんけど？」

「えっ、嘘!？」

それではまた次回。

「名乗らずに終わるの!？」

さよならー。

「ちよっとおおおおおおおおお!!!!!」

第2話

「自己紹介は大切だけど、最優先は現状の説明」

了

第2話 「自己紹介は大切だけど、最優先は現状の説明」(後書き)

霧明

「主人公の名前が出なかったのって、仕様なのかよ……。」

鮮血

「そうだよ。」

????

「酷いじゃないですか、それ……。」

鮮血

「まあ、別に決まって無い訳じゃないから。」

????

「それならいいんですけど……。」

鮮血

「次回もお楽しみに。」

第3話 「擬人化」人（性別は女）「ラッキーマーハプニング」不幸」（前書き）

鮮血

「スランプです！」

???

「知りませんよ……。」

鮮血

「不定期更新とは言え、遅くなって申し訳ありません……。」

???

「それでは、3話目です。」

鮮血

「どつぞ。」

第3話 「擬人化」人（性別は女）「ラッキーハプニング」不幸」

「はい、オムライス。」

「わぁーっ」

出来たてのオムライスを置くと、鉛筆は目を輝かせる。

「熱いから気を付けてね。」

スプーンを差し出し、鉛筆は早速食べる。

「いただきまーすっ」

子供のようにそれを美味しそうに頬張る。

「美味しいです〜。」

「良かった。」

エプロンを椅子にかけ、少年――しすいかげあき紫水影晶も食べる。

「ところで、君の名前はなんなの？」

「ほえ？」

「あ、ケチャップが付いてるよ。」

ティッシュを取り、鉛筆の頬にあるケチャップを拭ってやる。

「ありがとうございます、マスター。」

「いい加減、そのマスターってのも止めて欲しいんだけど。」

「どうしてですか？」

「僕がマスターって言うのが変だし。」

「ですが、私の所有者なんですよ？」

「そうは言っても、変な感じがするから却下。」

「むー……。」

「それでは、“影晶様”でどうでしょう？」

「“様”も勘弁……。」

「ええー……。」

「普通に影晶でいいよ。」

「マスターって感じがしません。」

「だから、僕はマスターって似合わないから。」

「むー……。」

脹れっ面になり、唇を尖らせる鉛筆だが、ポンと手を叩く。

「では、間を取って“影晶さん”はどうでしょう。」

「まあ、それなら。」

「それでは、改めてよろしく願いします、影晶さん。」

「うん。」

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー♪

第3話 「擬人化」人（性別は女）「ラッキーハプニング」不幸」

「ところで、君の名前はどつしよつか？」

「と言つと？」

「鉛筆つて、呼びにくいんだけど……………」
「名前らしくもないし。」

「それでは、マス……………じゃなくて、影晶さんが決めてください。」
「うーん……………」

いきなりそう言われても、と悩む。

と、彼女の服が目映る。

「萌葱色……………」

そこから取るかと思い、辞書を引っ張る。

「じゃあ、萌葱の萌を使って、萌^{めくみ}はどう？」

「いいですね」

嬉しいのか、鉛筆——萌は顔を綻ばせる。

「では、私は今日から紫水萌です」

「え？」

「名字は僕のを使うの？」

「もちろんです。」

影晶さんの持ち物なんですから。」

「まあ、いいけど。」

特に断る理由も無い為、影晶はあつさりと許可する。

「萌、お風呂が沸いたから、先に入っていいよ。」

「いえ、影晶さんこそ御先にどうぞ。」

互いに譲り合い、一向に進まない。

「けど、萌の着替えはどうしよう？
女物の服なんて、1つも無いよ？」

「お母様のを拝借します。」

「母さんの？」

「はい。」

確かに母のはあるが、サイズが合うかは分からない。

しかも長い間着ていない為、クタクタになっているだろう。

「着られれば、それでいいです。」

「つていうか、鉛筆に戻ったんじゃダメなの？」

「あ、そういう方法がありましたね！」

今思い出したように、萌は言う。

「でも、擬人化したとなると、今までのように鉛筆として見るのは難しいや……………」

やっぱり、その格好でいいよ。服は僕が用意するから。」

洋服棚を開け、古めかしい母の衣服を取り出す。

「これでいいかな？」

衣服を整え、萌に渡す。

「それでは、お風呂に入ってきてまーす」

着替えを受け取った萌は、さっさとお風呂場に向かった。

「ふう……………」

しかし――

「あの、お風呂場ってどこですか？」

扉からひょっこり顔を出しながら、萌が聞いてきた。

「そっか。」

ずっと筆箱に入っていたから、場所を知らないのか。」

萌を案内し、使い方も教える。

「何かあったら、このボタンを押して。

そうすれば、僕に知らせてくれるから。」

「はい。」

萌が納得したようなので、影晶は2階に戻る。

「布団の用意をしておこう。」

萌の分も用意すると、ピピピと音が聞こえてきた。

「萌？」

今は、風呂場からの呼び出し音だ。

「なんだろうっ?。」

1階に下り、風呂場の手前にある、脱衣場の扉をノックする。

当然、萌が風呂から出ていない為、返事は無い。

扉を開け、中を窺う。

萌の姿が無く、それに安堵し、風呂場の扉を叩く。

「萌、どうしたの？」

すると、突如扉が開き、萌が飛び出してきた。

「影晶さーん！」

「どわあ！？」

しかもいきなり抱き付かれ、萌に押し倒される形で、影晶は倒れる。

当然のことながら、萌は裸。

影晶はとりあえず、目を閉じ、更には手で視界を覆う。

「離れてよ、萌！」

っていつか状況説明をしてよ！

いや、その前に何かで体を覆ってくれない！？

それか鉛筆に戻れ！」

もうツツコミ満載で叫び散らす影晶に、萌はテンパった様子で捲し立てる。

「シャワーを使ったら、冷たい水があー！」

しかも、それに驚いたと思ったら、すぐに熱いお湯になったんですう！」

「当たり前でしょ！？

って、そんな事で呼ばないでよ！」

「私は初めてなんですよ！
なのに、キズモノにするなんて……。」

「誤解を招くような事を言うな！」

「っていうか、そんな言葉、どうやって覚えた!？」

「私をキズモノにした責任、取ってください！」

[illegible]

第3話 「擬人化」人（性別は女）「ラッキーハプニング」不幸

第3話 「擬人化」人（性別は女）「ラッキーマーハプニング」不幸」（後書き）

鮮血

「と言つ訳で、影晶と萌です。」

影晶

「紫水影晶です。」

萌

「萌です！」

鮮血

「ようやつと名前が出せたね。」

影晶

「まったくですよ……。」

萌

「私はともかく、影晶さんまで出ないなんて……。」

鮮血

「しょうがないじゃん。」

書いてて思い付いたんだし。」

影晶

「って言うか、僕は最後のやりとりも気に喰わないんですけど!?!」

萌

「そうです！」

影晶さんが私をキズモノにするなんて・・・。」

影晶

「いい加減、誤解を招く言い方止めてくれる!？」

鮮血

「まあ、気にしないの。」

影晶だって、下心がある訳じゃないし。」

影晶

「当たり前ですよ!」

鮮血

「さてさて、今回は皆様にお願ひがあります。」

今作の主人公である、紫水影晶と、萌のイメージＣＶを募集します。

できれば、その方が何をやっていたかも記載してくれると助かります。」

萌

「それでは、次回もお楽しみに♪」

キャラ設定

・紫水影晶 しすい かげあき

物持ちのいい少年で、基本的には誰にでも優しい。

しかし、それ以外は何事も平凡。

唯一、ノートが綺麗な点が挙げられる。

両親は旅行好きで、家に帰ってくる事は、滅多に無い。

年の離れた兄がいるが、別々に暮らしている。

イメージＣＶ 下野紘さん

・バカとテストと召喚獣／吉井明久役

・テイルズ オブ シンフォニア・ラタトスクの騎士・ノエミル・

キャスト二役

・紫水萌 しすい めぐみ

影晶の鉛筆が擬人化した。

名前は萌葱色から取った。

一生懸命な性格で、苦手な事以外なら真面目に取り組む。

身長は小さく、150cmにも満たない。

影晶の事を「影晶さん」と呼ぶ。

イメージCV 伊藤かな恵さん

・テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー2/カノン
ノ・イアハート役

・宙のまにまに/明野美星役

・紫水氷雨^{しすい ひやめ}

影晶が幼少期の頃からあるタオルが擬人化した。

氷襲の服を着ていた事から、氷雨と名付けられた。

影晶の事を慕っているが、性格は多少ズレている。

面食いで、自分の好みの男性を見かけると、恍惚の表情を浮かべる。
また、妄想が突拍子も無い事に繋がる事もしばしば。

影晶を「影晶様」と呼ぶ。

イメージCV 井上喜久子さん

・テイルズオブデスティニー/フィリア・フィリス役
・CLANNAD/古河早苗役

第4話 「2人目が出るよ！ だけど萌との子ではありません！」（前書き）

鮮血

「ふう、なんとか続きを思いつけました！」

影晶

「嘘つかないでくださいよ……。
本当は、ストックが書けるまで更新したくなかったから、
ここまで遅くなったんじゃないですか。」

萌

「そうですよー！」

鮮血

「まあ、他にも書かなきゃいけないのがたーくさんあるからね。」

影晶

「計画的にやりましょうね？」

鮮血

「善処します。」

なんとかスパイラルの題名を決めて、
それが5話ぐらいまで書けたら掲載しようかなあ……。」

萌

「まだ1話目の途中ですけどねw」

鮮血

「どうせ僕の作品を期待してる人なんて……。」

影晶

「いなきゃこんな屑作品に感想なんて来ないと思いますよ?」

鮮血

「そつか。」

影晶

「憐みの気持ちがあるのかもしれませんが・・・。」

鮮血

「・・・orz」

萌

「それでは第4話をどうぞ!」

影晶

「って、2人目が出るの早くない!?」

第4話 「2人目が出るよ！ だけど萌との子ではありません！」

「はぁ……………」

影晶の溜息が、脱衣場に零れる。

彼の目の前にある扉の向こう側からは、シャワーの音が聞こえる。

それを耳にしながら、影晶はふと思う。

（どうしてこうなった？）と。

数分前、萌がシャワーの使い方におっかなびっくりし、抱き付かれた後。

「という事で、シャワーはすぐに暖かいお湯が出る訳じゃないんだ。

」

バスタオルを二重に巻かせた萌に、改めてシャワーの使い方を教える。

「なるほど。」

理解したのか、萌は納得したようだった。

「それじゃあ、僕は戻るね。」

そう言つて、踵を返した影晶だったが、萌に足を掴まれる。

「何？」

「あの、まだ不安です……………」

涙を目に滲ませ、上目遣いで影晶を見詰める萌。

その姿たるや、小さい背も相まって、正に小動物だった。

「不安つて……………」

さほど大した事はないと思つたが、萌は今まで鉛筆だったのだ。

筆箱の外は、目新しい物ばかりだろう。

「分かつたよ……………」

半ば諦めの感情に負けたように、影晶は同意した。

「それでは、髪と体の洗い方を教えてください。」

「無理言つな！」

影晶の叫びが、再び響いた瞬間だった。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー♪

第4話 「2人目が出るよ！ だけど萌との子ではありません！」

「はぁ……………」

冒頭と同じように溜息をつき、影晶はシャワーの音が響く風呂場の扉に目をやる。

それが止まったかと思うと、萌の問いかけが聞こえてきた。

「影晶さん、洗い終わりました。」

「それじゃあ、予め渡しておいたタオルで体をよく拭いて。」

「はい。」

萌がそろそろ出てくる事を知り、影晶は着替えとバスタオルを用意する。

「拭けました。」

「出てきていいよ。」

脱衣場の外に出て、萌と鉢合わせしないようにする。

「出たら、足拭きマットで足の水分を取って。」

「はい。」

影晶の指示に従い、萌は順々にこなしていく。

「次に、バスタオルで改めて体を拭く。
それが終わったら、服に袖を通して。」

「出来ましたー。」

萌に指示を飛ばし、程なくして彼女が完了した事を知らせてくる。

「後は髪を乾かすから、僕も手伝うよ。」

萌が服を着ている事を再確認し、扉を開ける。

「って、やっぱりだぼだったね……………」

苦笑する影晶の前には、手が袖から出ていない萌の姿があった。

「お母様、大きい方なんですネ。」

（いや、萌が小さいだけだよ……………」

それを口にはださず、ドライヤーを手に取る。

「ほら、後ろ向いて。」

髪を乾かす旨を伝え、萌を促す。

やがてそれが終わり、萌を2階に連れていく。

「今日は、萌はここで寝て。」

僕はあそこで寝るから、何かあったら呼んで。」

「ですが、私は鉛筆の状態でも構いませんよ。」

「擬人化しちゃったし、君をただの物には見れないよ。」

これからは、人として見るからね。」

「では、私を鉛筆として使わないって事ですか？」

「まあ、そうなるね。」

それに、これ以上使ったら萌がどうなるか分からないし……………」

「そういえばそうですね！」

「今気付いたの!？」

影晶の言う通り、これ以上萌を鉛筆として使い、短くなってまた削った場合、彼女がどうなるかは皆目、検討もつかない。

なので、影晶は使うのを止める事にしたのだ。

「それじゃあ、僕はお風呂に入ってくるから。」

「それでは、先におやすみします。」

「おやすみ、萌。」

萌が布団に潜り込むのを尻目に、影晶は1階へと下りた。

風呂場に向かう前に、玄関の戸締まりを確認する。

「大丈夫だね。」

そうして踵を返す影晶だったが、ある物が目に映る。

「端が解れてる……………」

影晶が手に取ったのは、カーテンだった。

「夜に取り外すのはマズいなあ……………」

1人暮らしの影晶は、外から見られる事をかなり気にする。

「明日、学校から帰ってきたら繕うからね。」

カーテンをポンポンと叩き、影晶は風呂場に向かった。

「ふう……………」

湯船に浸かり、今日の事を振り返る。

いきなり擬人化した鉛筆。

萌の口から語られた、擬人化する存在。

「訳が分かんないよ……………」

ぼやき、髪を洗おうと湯船を出る。

「これ……………」

しかし、また別の物が気になった。

湯を掬う桶だ。

それは、底に罅が入っていた。

（何度か落としちゃったからなあ……………。）

とは言え、大して水漏れする事は無く、気にする程の事では無い。

（まあ、あくまで僕の考えだけど。

新しく買うのも面倒だから、これでいいや。）

大して気にする事無く、影晶は髪を洗った。

影晶が風呂からあがった時、時計の針は9時を指していた。

明日も学校があるので、その支度をする。

「あ……………」

寝る前に、影晶はタオルがそのままの事に気付く。

「忘れてた……………」

今からしまおうにも、既に眠気が体を包んでいた。

「明日にしよう……………」

ちよっぴり悪い気を胸に秘め、影晶は眠りについた。

翌朝。

「ん……………」

影晶は、覚醒しきつた感覚に違和感を覚える。

何故か重みを感じる。

（萌が寝ぼけてこっちに來たのかな？）

そんな事を漠然と考えながら、自分に乗っかっている何かを、半ば無理矢理どかす。

そして、体を起こしてその何かを確認する。

「え……？」

そこには

「女性？」

真つ白な髪に、氷襲を来た女性がいた。

「誰ええええええええええ！？」

叫んだ影晶に最初に反応したのは、10分後に起きた萌だった。

第4話 「2人目が出るよ！ だけど萌との子ではありません！」

第4話 「2人目が出るよ！ だけど萌との子ではありません！」（後書き）

鮮血

「はい、2人目の登場です！」

影晶

「って、最後だけじゃないですか！
不定期更新なのに、最後だけにしか姿を現さないって・・・。」

萌

「確かに、次の話の頃には忘れ去られているかもしれませんがね。」

鮮血

「多分、大丈夫だよ・・・。
さてここで、影晶と萌のイメージＣＶを。」

紫水影晶

下野紘さん

・ バカとテストと召喚獣 / 吉井明久役
・ テイルズ オブ シンフォニア - ラタトスクの騎士 - / エミル・
キャスタニエ役

紫水萌

伊藤かな恵さん

・テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー2 / カノン
ノ・イアハート役

・宙のまにまに / 明野美星役

鮮血

「上記に決定いたしました！」

陽亮先生、若輩侍先生、ありがとうございます！」

影晶

「それで、次回は？」

鮮血

「次回は、あの氷襲の衣服を着た人についてです。
ちよつと大変な目に遭ってもらいますが。」

萌

「誰がですか？」

鮮血

「主に影晶。」

影晶

「何で僕が！」

鮮血

「あの人は何者なのかを明かせば、その理由も分かります。
それでは……。」

萌

「次回もお楽しみに」
♪

第5話 「キャラは作者の趣味？ いいえ、世界の趣味です。」（前書き）

皆様に、少しでも明るい話を提供しようと、
ストックを考えずに投稿です！

自分に出来る事（募金など）は、なるべく多くはやっているのですが、

それでも、ニュースをみるとまだまだなんだと、
もどかしい気持ちになります・・・。

出来る事は少ないですが、せめて毎日多くの方が救われる事を、切に願います。

それでは、第5話をどうぞ。

第5話 「キャラは作者の趣味？ いいえ、世界の趣味です。」

「君は、誰？」

「誰って、萌ですよ！？」

「昨日、名前をくれたじゃないですか！」

「萌じゃなくて、こっちの人に聞いているんだけど……。」

「……むにゃ？」

「改めて聞くけど、君は誰？」

「私はタオルです。」

眼前にいる女性は、至極当然のように言う。

「タオルって事は、昨日、僕が繕ったアレ？」

「はい。」

笑顔で答えるその女性は、影晶と同一年ぐらいで、身長も周囲の女性と同じように、160より若干高めと言った所か。

「たくましい体つきにも、心惹かれます。」

「もう何も言わなくていいよ！」

「僕が物凄く恥ずかしいだけだし！」

「何故ですか！？」

「これから影晶様の美しい体について語ろうと言っのに！」

「いらないからね！？」

「大体、誰も得しないよ！」

「語っている私が悦楽に浸れるという素晴らしさがあります。」

「君はそうかもね！？」

「だけど僕が辛いから止めて！」

一向に認めない影晶に、タオルは嘆息する。

「はぁ……………」

小さい頃は、あんなにも激しかったのに……………」

「か、影晶さん……………。……………。」

タオルの言い様に、萌が顔を真っ赤にして影晶を見る。

「誤解を招く言い方しないでくれる！？

それと萌は勘違いしてるから！」

「本当に激しかったのに……………」

「とりあえず、タオルさんの名前を決めましょうか。」

互いに落ち着いた所で、萌がそう切り出す。

「お願いします。」

礼儀正しくお辞儀するタオルを、憔悴しきった影晶が見る。

「じゃあ、萌の時と同じパターンで決めようか。」

衣服を改めて確認し、氷襲の色に見入る。

「影晶様、私を欲しているからって、そんなに見詰めでください。」

頬を赤くし、それを隠すように両手をそこにあてる。

「今ので物凄く君を廃棄処分したいと思ったよ。」

「申し訳ありません！」

廃棄処分という単語が出た為、タオルはすぐさま謝罪する。

やはり、根本的には物である事に変わりはない。

棄てられる事はこの上なく恐ろしい事なのだろう。

「じゃあ、氷雨でどうかな？」

「氷雨……。」

はい、ありがとうございます。」

タオル改め、氷雨は笑みをみせる。

「それじゃあ、朝御飯を作ろうか。」

「影晶様、これからは私が家事をします。」

「氷雨、家事出来るの？」

「はい。」

特に洗濯は朝飯前です！」

自信に満ちた瞳に、影晶は信用する。

「でも、どうして洗濯が得意なのですか？」

ふとした疑問を、萌が聞く。

「愚問ですね。」

私自身が、常日頃から洗われているからです！」

「全然誇って言う事じゃないよ!？」

胸に手をあてながら高らかに宣言する氷雨に、影晶はツッコム。

「素晴らしいです!」

「しかも萌が感化されてるし！」

目を輝かせる萌にもツツコミ、影晶は朝から疲労する。

「僕はそろそろ学校に行くね。」

「あ、私も行きます。」

影晶が鞆を手にとると、萌が傍に駆け寄る。

「萌は氷雨と一緒に、家でのんびりしていていいよ。」

「え？ でも私、影晶さんの鉛筆ですよ？」

「これからは、“人として見る”って言ったでしょ。
わざわざ鉛筆になって来なくてもいいんだよ。」

「でも、影晶さんの傍にいたいです！」

だっ子のように言い、小さい体でぴょんぴょん跳ねる。

「分かったよ……………」

嘆息し、氷雨を呼ぶ。

「氷雨、頼みがあるんだけど。」

「なんでしょうか？」

「お金の使い方って、分かる？」

「はい。」

「それじゃあ、萌と氷雨に合う洋服を買ってきてもらっていいかな？」

引き出しからお札を取り出し、氷雨に手渡す。

「下着も含めてだから、男の僕が行くのは、ちょっと……………」

「分かりました。」

氷雨はそれを受け入れ、萌の体型と、好みをメモに書き留める。

（影晶様が欲情しそうな物を……………。）

「言っておくけど、変な衣服を買ってきたら、廃棄処分だからね……………」

凄みを聞かせて言われ、氷雨は畏縮する。

「こ、心得ております……………」

土下座する氷雨の顔には、明らかに冷や汗が滲んでいた。

それを見た影晶は、嘆息する。

「前途多難だなあ……………」。

第5話 「キャラは作者の趣味？ いいえ、世界の趣味です。」
了

第5話 「キャラは作者の趣味？ いいえ、世界の趣味です。」（後書き）

鮮血

「第5話でした！。」

さて、タオルさん改め、氷雨さんです。」

氷雨

「はい。」

よろしくお願い致します。」

影晶

「何故にこういうキャラになってしまったのですか？」

鮮血

「まあ、タオルだから……。」

影晶

「そんな理由って……。」

鮮血

「変な……というか、あんな感じになったのは、
明確な所、僕にも分からない。」

一応、僕も書き辛いキャラだなあとは思ってるよ？」

影晶

「だったら書かなきゃいいじゃないですか！」

鮮血

「まあしょうがない。」

鮮血

「さて、新たに氷雨が出てきたので、皆様から氷雨のイメージＣＶを募集いたします。」

氷雨

「よろしくお願いします。」

萌

「女性の下着って、こういう過激な物が多いんですね／＼／＼／＼／」

氷雨

「萌様、似合っていますよ。」

食べてしまいたいぐらいです／＼／＼／＼／＼／

萌

「何を食べるんです？」

氷雨

「ああ．．．／＼／＼／＼／＼／
その子供らしさもまた．．．。」

影晶

「廃棄処分．．．。」

氷雨

「申し訳ありません！（汗）」

鮮血

「こんなんで大丈夫なのかな・・・？」

第6話 「擬人化小説だから、学校の話は意外と面倒！」（前書き）

鮮血

「この作品、もう諦めていい……………」

影晶

「初っ端から何を言っているんですか……………」（汗）

鮮血

「学校の話がメンドイ！」

影晶

「知りませんよ、そんな事……………」。

あの屑作者はほつといて、6話目をどつぞど。」

第6話 「擬人化小説だから、学校の話は意外と面倒！」

「じゃあ、行こうか。」

「はい」

影晶の確認に、萌は明るく返事をし、銀のリボンを解く。

そして、一瞬眩く光ったかと思うと、1本の短い鉛筆になった。

それを筆箱にしまい、影晶は靴を履いて家を出た。

「それにしても、氷雨は1人で平気かなあ？」

「多分、大丈夫だと思いますよ。」

割としっかりした方の方ですし……………」

「萌、僕に話しかけたりしたら、他の人にも聞こえるんじゃないか………」

「大丈夫です。」

擬人化した物の声が聞こえるのは、擬人化させた経験のある方のみです。

それに、そうでなかったら影晶さんも常日頃、周囲の物の声を聞いてますよ。」

「確かに。」

萌に指摘され、影晶は納得する。

「ですが、影晶さんの声は声に出さないと、私達にも聞こえません。」

「って事は、僕が鉛筆の状態の萌と会話をしていたら……………」

「そうですね。」

周囲の方には聞こえない訳ですから、

「あの人は1人で何を喋っているのだろう？」って思われますね。」

「気を付けるよ……………」

「おはよう、影晶。」

すると、背後から女性の声がかかった。

振り返ると、烏羽色の髪をポニーテールにした少女がいた。

「おはよう、夜宵。」

彼女の名は、星月夜宵^{ほしづきやよい}。

影晶とは幼馴染で、家も割と近い。

「今日はポニーテールなんだ。」

「うん。」

友達が可愛かったから、思い切って私もやってみただけ………。

へ、変じゃないかな………？」

気になるのか、夜宵は影晶の方をチラチラと見ながら聞く。

「別に、そんな事無いよ。」

「そっか。」

良かった。」

笑みを浮かべ、影晶の隣に並ぶ。

「それにしても夜宵って、どんな髪型でも似合うよね。以前は、髪型を変えるのが億劫になっていたけど。」

「そ、それは………私も高校生になったんだし、いい加減、そっという事に気を遣った方がいいかなあと思って………。」

「そうなんだ。」

影晶の言う通り、夜宵は中学生の頃は髪型を変えたりはしなかった。いつも長いストレートにしており、それを櫛で整えただけ。

それでも、烏羽色と相まって美しい為、気にする程の事でも無かつ

た。

風になびかせる姿は、中学では評判で、一時には、学校のアイドルとして見られた事もあったと、影晶は耳にした事がある。

しかし、高校に入ってからにはちよくちよく髪型を変えていた。

サイドテールだったり、ツインテール。

今日みたく、ポニーテールだったりした時もあった。

「お母さんや友達は、「遅いんじゃないか」って言うってたけどね……。」

苦笑する夜宵に、影晶も笑う。

「でも、それは人によりけりだから。

夜宵が気にする事は無いと思うよ?。」

「うん、ありがとう。」

夜宵は笑みを浮かべた。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

第6話 「擬人化小説だから、学校の話は意外と面倒！」

「おはよう。」

「よう、影晶、星月」

教室に入った影晶と夜宵を、1人の少年が迎える。

「おはよう、鈴絃。」

いずも れいげん
出雲 鈴絃。

高校生になった影晶と夜宵の、最初の友人だ。

夜宵と別れ、自分の席に着く。

ちなみに、鈴絃は隣の席だ。

「なあ、そろそろ体育祭だけど、お前は何に出るか決めたのか？」

「僕？」

いや、何も。

第一、種目が一切分かって無いじゃん。」

「それもそうか。

ちなみに俺は、なんか燃える競技がいいな。」

「例えば？」

「棒倒しとか、騎馬戦とか。」

「過激だね…………。」

鈴絃の口からでた競技に、影晶はそう言った。

「お前は内向的だもんな。

まあ、100m走とかでいいんじゃないか？」

「そうするよ。」

鞆から教科書などを取り出し、机の中にしまった。

「体育祭、ですか……………」

家に帰り、萌は体育祭の事を氷雨に話した。

「影晶様は何に出場なさるのですか？」

走らせていた鉛筆を止めて、影晶は氷雨の方を見る。

「100メートル走かな。

すぐに終わるし……………」

「ご両親も、楽しみにしているのでしょうかね。」

「…そんな事無いよ。

2人は旅行に行つてて、帰つてこないんだから。」

影晶の声が、僅かに暗くなった。

「……………失礼しました。」

「気にしないでいいよ、氷雨。」

陳謝する氷雨に、影晶は笑った。

体育祭、当日――

「何やってるの……………」

影晶は、目の前でニコニコと笑っている人――氷雨を見ていた。

「何と仰いまして……………」

こうして、応援に参りました。」

「僕はそんな事、頼んで無いよ。」

「ですが、先日寂しそうな顔をしておりましたから……………」

「……………」

氷雨の言葉に、影晶は押し黙るしかなかった。

「影晶様は、まだまだ子供です。
甘えて、いいですよ。」

立ちつくす影晶を、氷雨は優しく抱き締める。

「氷雨……………」

「はい、影晶様。」

「影晶、そろそろ片付け……………」

そこへ、鈴絃がひょっこりと姿を現した。

「どちら様？」

「え！？」

えっと、兄さんの友達だよ！」

適当に誤魔化す影晶に、氷雨も合わせる。

「初めまして。

氷雨と申します。」

「どうも、出雲鈴絃です。

影晶、もう片付け始まつてるぜ。」

「うん、分かった。」

鈴絃を先に行かせ、影晶は氷雨の方に向き直る。

「それじゃあ、氷雨は先に帰っててくれる？」

「いえ、学校の入り口でお待ちしています。」

「でも、遅くなったら悪いし……………」

「そうしたいんです。

御迷惑でなければ、ですが。」

「分かった。」

「じゃあ、待っててもらおうかな。」

「はい。」

片付けを終えた影晶は、入り口で待っていた氷雨と合流し、彼女と並んで帰る。

ちなみに、萌は家でおとなしくテレビでも見ているか、寝ているかどうか。

「氷雨。」

「はい？」

「今日はありがとう。」

「僕が両親の事を気にしているって知って、わざわざ来てくれたんだよね？」

「聡いですね。」

「その通りです。」

「嬉しかったんだ……。」

「誰かにこうして来てもらえて……。」

「私は、影晶様に救って頂きましたから。
主が悲しんでいるのは、見過ごせないのです。」

「うん……………」

「さあ、帰りましょう。」

萌もお腹を空かせているでしょうし。」

「そうだね。」

差しのべられた氷雨の手を、影晶は逡巡しながらも握り返した。

第6話 「擬人化小説だから、学校の話は意外と面倒！」 了

第6話 「擬人化小説だから、学校の話は意外と面倒！」（後書き）

鮮血

「はい、今回初登場の星月夜宵さんです。」

夜宵

「初めまして。」

鮮血

「そして、I・K先生より名前を頂いた出雲鈴絃くんです。」

鈴絃

「よろしく。」

鮮血

「2人は影晶の親友って事で登場してもらっています。」

鈴絃

「俺はまあ、親友って事で問題は無いけどよ。」

夜宵との関係ってのはどうなんだ？」

鮮血

「恋愛描写？」

分からん。今の所は入れる気はないけど……………。

突拍子もなくやつちゃうかもね！」

鈴絃

「おいおい……………」

夜宵
「？」

鮮血

「氷雨が真面目すぎる件について……………」

氷雨

「悪いですか？」

鮮血

「いや、全然。」

ただ、前のとキャラが違い過ぎるなあと思って。」

氷雨

「私が常にあんなだと思われるのは心外です！
ちゃんと影晶様の事を見ているのですよ！」

鮮血

「ごめん、ごめん。」

氷雨

「それにああしておけば、姉というポジションを占領できますし……………」

ああ、影晶様が甘えてくるのが目に浮かびます……………

／／
「

鮮血

「やっぱり下心があつたんじゃん………」（汗）
」

第7話 「貴方からの優しさ」(前書き)

鮮血

「長らくお待たせしてしまつてすみません！orz」

影晶

「リアルがかなり忙しい事と、他にも小説がありますからね。」

鮮血

「うん……。」

それに、ちょっと大変な展開にしちゃったからね……。」

影晶

「え？(汗)」

萌

「どんな展開なんですか？」

氷雨

「ズバリ、私と影晶様の、口にするのも恐れ多いほどの淫靡な生活を……。」

鮮血

「いや、無いから……。(汗)」

萌

「『インビ』って、なんですか？」

影晶

「萌は知らなくていいんだよ。」

氷雨

「ふむ……………」

萌に淫らな事を教えるのも……………」

影晶

「氷雨？（怒）」

氷雨

「も、申し訳ありません……………」

萌

「それで、結局どんな展開なんですか？」

鮮血

「まあ、お楽しみにつて事で。」

第7話 「貴方からの優しさ」

「もうすぐテストかあ……………」

気だるそうに呟く鈴絃に、影晶は苦笑いした。

「そう言うけど、鈴絃だってちゃんと勉強してるじゃん。いつも僕より成績は上だし。」

「まあ、そうなんだけどよあ……………」
「やっぱり、テストって聞くだけで気だるくなるんだよ。」

「そういうものなのかな？」

「そうだって。」

なあ、夜宵もそう思うだろ？」

「……………」

鈴絃の問いかけに、夜宵は何故か答えなかった。

「おい、夜宵？」

「ふえ！？」

な、何、突然!？」

「突然じゃねえよ……………」。
さっきから声をかけてたぞ。」

「あ、ごめん……………」。
何の話だっけ？」

「テストだよ。」

「ああ、そういえばもうすぐだったね。」

「夜宵は、最近はどう？」

「うん、ちゃんとやってるよ。」

影晶の質問に、夜宵は力を入れて答える。

どうやら、それに偽りはないようだ。

「それじゃあ私、ちょっと友達の所に行くね。」

弁当箱を片付け、夜宵は女子の多くいる所へと向かった。

「なんだか最近、夜宵の様子が変だよね。」

「上の空が多いみたいだしな。」

「どうしたんだろ？」

「気になるんなら、聞いてみりゃあいいじゃん。」

「簡単に言ってくれるけど、それは……………」

「幼馴染なんだろう？」

難しいと言おうとした影晶の言葉を遮り、鈴絃はピシャリと言う。

「それはそうだけど……………」

いつまでも幼馴染だからって言っても、迷惑だろうし……………」

「それはお前の考えだろう？」

夜宵は、心配してもらった方がいいと思ってるかもしれないじゃん。」

「まあ、ね……………」

鈴絃の言う事は尤もなのだが、それができれば苦労は無いと、影晶は内心で改めて実感していた。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

第7話 「貴方からの優しさ」

その日の夜――

「影晶さんって、夜宵さんと幼馴染なんですよね？」

夕食の片付けをしている最中、萌が唐突にそんな事を聞いてきた。

「うん、そうだよ。」

「夜宵さんとは、どのような方なのですか？」

1度も会った事のない氷雨は、夜宵について訊ねた。

「どのようかって言われても……………」。
普通の女の子だよ。」

そう言って、お茶を手取る。

「そうでしたか。」

てつきり、影晶様の妃かと……………」

「ブフーツ!？」

「わにやつ!？」

突拍子もない事を言いだした氷雨の言葉に驚き、影晶はお茶を噴く。

そして、反対側に座っていた萌は、それを既の所で回避した。

「夜宵とはそんな関係じゃないよ!」

「そこまで強く否定なされると、逆に怪しいですよ。」

クスクスと笑っている氷雨の相手をこれ以上やっては疲れると判断し、

影晶は萌の安否を気遣い、テーブルを布巾で拭く。

「夜宵さんとは、いつぐらいに知り合ったんですか？」

「幼稚園の頃だったかな？」

組が同じで、保護者の迎えがあつた時に知り合つたんだつたと思う。

あまり鮮明な記憶では無い為、影晶は敢えて「思う」と最後につける。

「小さい頃の夜宵は、今より結構恥ずかしがり屋だったかな？
よく夜宵のお母さんの足の後ろに隠れてた事があつたし。」

「でも、今はそこまでではありませんよね。」

萌は、鉛筆の時に夜宵のクラスでの様子を思い出す。

そこまで活発的ではないにしろ、恥ずかしがり屋でも無かった。

「僕と仲良くなったのも、最近って訳じゃなくて、小学校に入っただけだったよ。」

「御二人はそんなに小さな頃から赤い糸で結ばれていたのですね……。」

楽しそうに恍惚の表情を浮かべて何かを言っている氷雨を無視し、影晶は続ける。

「よく一緒に遊んだし、それぐらい喧嘩しちゃったこともあったけど……。」

「だけど、夜宵と知り合えて良かったって、絶対に言える。それぐらい、僕は夜宵の事を信じているからね。」

「ラブラブですね。」

「ですね。」

「違うと思う。」

生暖かい視線を向けてくる氷雨と萌に、影晶はそれを一蹴する。

「そろそろ勉強しないと……。」

萌と氷雨をお風呂に行くように伝えてから、影晶はノートと教科書を開いた。

「そうだ。」

1度席を立ち、携帯電話を手に取る。

アドレス帳を開いて、夜宵の名前を探す。

「電話………したほうがいいのかな？」

もしかしたら、自分の心配のし過ぎなだけかもしれない。

そう思い、携帯電話を閉じようとするが――

「………夜宵………」

――それでも、心配な事に変わりはない。

ならば、電話した方がいいだろう。

そう思い、意を決して夜宵に電話した。

一方、夜宵も携帯電話を持ってディスプレイと睨めっこをしていた。

理由は、影晶に電話をするかどうかを悩んでいたから。

「はぁ……………」

しかし、それが出来ずに諦めては、再び携帯電話を手に取る事を繰り返していた。

ベッドに身体を預けるようにして身を倒し、またもや携帯電話と睨めっこする。

と、その時――

「ひゃっ!？」

――いきなり振動しだした携帯電話に、夜宵は飛び上がらなければかりに驚く。

「あ…………影晶から……………」

表示されている名前に、僅かに安堵し、電話に出る。

「もしもし?」

「もしもし、夜宵?」

「うん。」

「その……………」

何かを言おうとしている影晶に、夜宵は急いたりせず待つ。

影晶はいつも、優しいと言う事を知っているから。

小さい頃からずっとそうだった。

いつも自分に優しくしてくれる。

それが嬉しくて――

だけど、時折辛くて――

だから、何度か喧嘩してしまう事があった。

その後には、寂しいという感情が溢れてくるだけだと知っていながらも、

互いに喧嘩してしまった。

仲直りする時は、決まってほぼ同じタイミングだった。

自分が謝ろうとするときには、影晶も謝ろうとしてきた。

そして、影晶は喧嘩しても変わらない優しさを持っていた。

自分にも、それぐらいの優しさがあれば、影晶に恩返しができるのにと、

半ば嫉妬していた時期もあるぐらい、彼の優しさは嬉しかったのだ。

「夜宵、最近何かあった？」

「どうして？」

今日だって、影晶は自分の事を心配し、こつやって電話してきてくれた。

「最近、ちょっと上の空な事が多かったから……………」。

「大丈夫だよ、影晶。」

気丈に振る舞ったつもりだが、その声はしっかりとしていただろうか？

夜宵には、それが気がかりだった。

「なら、いいんだけど……………」。

納得しつつある影晶の反応に、夜宵はホッとした。

「でも……………」。

「ありがとう、影晶。」

影晶が続けようとするのを遮り、夜宵は言う。

「心配してくれて、ありがとう。」

「あ、うん。」

「じゃあ、また明日ね。」

「うん。」

また明日。」

電話を切り、1度息をつく。

夜宵は、切れた携帯電話をしばし見つめ、やがて笑みを浮かべる。

「ありがとう、影晶……………」

でも、こんな事言えないよ。」

彼女が視線を向けた先には、1人の少女がぐっすりと寝ていた。

第7話 「貴方からの優しさ」 了

第8話 「貴方への優しさ」(前書き)

鮮血

「長らくお待たせしてしまって申し訳ありません……………」

影晶

「作者さんもお忙しいので、目くじらを立てないで頂けると光栄です。」

鮮血

「いや、この先ちょっと展開に悩んでしましまして……………。
どうしたものかと悩みに悩んでおります。」

氷雨

「現在進行形なのですね……………」

鮮血

「さて、今回は新キャラも登場致します!」

影晶

「また擬人化ですか?」

鮮血

「そつだね。」

影晶

「いい加減、男の子が欲しいですよ……………」

氷雨

「簡単ですわ、影晶様。

私と交わって、男の子を……。」

影晶

「じゃあ、8話目をどうぞ！」

氷雨

「冷たいです…………orz」

第8話 「貴方への優しさ」

影晶が夜宵に電話をした翌日。

夜宵は朝早くに起きて、料理を作っていた。

「喜んでくれるかな………？」

ちよっぴり不安を滲ませながらも、料理を作るその手を緩めない。

鼻歌交じりに作られるそれは、いつもより量が多かった。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー♪

第8話 「貴方への優しさ」

その頃、影晶は困った事になっていた。

「空っぽ、だね…………。」

「空っぽ、ですね…………。」

「空っぽですー。」

上から、影晶、氷雨、萌が順々に言う。

3人の視線の先には、小さく縮こまっている少女と、炊飯器があっ

た。

「あの……………」

「ん、何？」

恐る恐ると言った感じで、少女が影晶に話しかける。

彼女の衣服はレモン色で、髪はオレンジでポニーテールに結ばれていた。

「私の所為で、ご迷惑をおかけしたみたいで……………」

シユンと縮こまる少女に、影晶は苦笑した。

実は彼女は、罫のはいった風呂桶が擬人化したものだった。

しかし、彼女が擬人化したのは朝早い時間だった為、誰もそれには気付かず、お腹を空かせていた彼女は、勝手に炊飯器に残されたご飯をたிரげてしまったのだった。

「お腹が空いていたんだから、しょうがないよ。」

影晶が頭を軽く撫でてやると、彼女ははにかんだ。

「とにかく、今日のお昼は購買にするしか無いね。」

「そうですね。」

「それと、氷雨はこの子の事をよろしくね?」

「はい。」

影晶の頼みに氷雨は頷いた。

「それじゃあ、黄金は氷雨の言う事をよく聞いてね?」

「はい! って、黄金と言うのは……………?」

「君の名前だよ。」

そう言うと、黄金は顔を輝かせた。

「ありがとうございます!」
「えっと、ご主人様。」

「できればそれは止めて欲しいんだけど……………」

「分かりました。」

それでは、兄さんでいいですか？」

「何で!？」

「私、兄さんが欲しかったんです。」

「まあ、黄金の為なら……………」。

敬語も、省きたかったら省いていいよ。」

「ありがとうございます、兄さん。」

黄金は顔を綻ばせた。

「擬人化した順番では、私が先ですから、私がお姉ちゃんですね！」

「萌、そういう事じゃないから……………」。

「わ〜い♪」

影晶をスルーし、姉と称する萌に、黄金が抱き付く。

しかし、黄金よりも萌の方が小さい為、ちょっぴり不思議な光景だ
ったりする。

「じゃあ、氷雨、黄金。
大人しくしててね？」

だから、その……よかつたら、影晶、食べてもらっていいかな？
／／／／／

「ありがとう、夜宵。」

今日のお昼の分、炊くの忘れちゃったんだよね。」

「そ、そうなんだ。」

そろそろ行こっか。」

「そうだね。」

2人はどちらともなく歩きだした。

お昼になり、影晶、夜宵、鈴絃の3人は、いつものように一緒に昼食を取る。

「あれ？」

弁当箱を開けた時、影晶は中身を見て不思議に思った。

「どうした？」

「夜宵、作り過ぎたにしては、量が夜宵のものと変わらない気がするんだけど。」

「へっ！？」

「そ、それは、その……………／／／／／／」

「み、見栄えが悪いと、影晶にも悪いかなあと思って。」

焦る夜宵は、デタラメの理由をでっちあげる。

「ふーん。」

それに納得したのか、影晶は先に食べた。

その様子にホッとしたのも束の間、今度は鈴絃が言う。

「おいおい、本当にその理由だと思ってんのか？」

「どういう意味？」

「どう考えても、作り過ぎたなんてのは嘘だろ。お前の為に作ったって、分かれよ……………」

「え、そうなの？」

「そ、それは……………／／／／／」

鈴絃に言い当てられた夜宵は、それに返す事が出来ずに押し黙る。

「まあ、つまりは、愛妻弁と……………」

「わぁー！／／／／／」

それ以上口走られては困るのか、夜宵は鈴絃の口を両手で塞ぐ。

「どうしたの？」

影晶には鈴絃の言った事が聞こえていなかったのか、彼は首を傾げた。

「なんでもないの！

なんでもないから！」

無理のある笑みを浮かべ、夜宵は鈴絃に耳打ちする。

「変な事言わないでよー！」

「変な事って……………」

「私と影晶は、そういうんじゃないの！」

「分かったよ……………」

夜宵が語気を強めた為、これ以上は互いに言い争いになるだけだと判断した鈴絃は、彼女に従う事にした。

「やれやれ……………」

世話のかかる。」

「どっちがよ……………」

互いに相手に呆れ、昼食に手をつけた。

第8話 「貴方への優しさ」(後書き)

鮮血

「夜宵、完璧な影晶の奥さんだよね……………」

夜宵

「わ、私は、そういう気は……………」

鮮血

「あ、無いの？」

「じゃあ、ヒロインは別のキャラに……………」

夜宵

「ええっ!？」

鮮血

「ん、困るの？」

夜宵

「そ、そういう訳じゃあ……………」

鮮血

「じゃあいいじゃん。」

夜宵

「で、でも……………」

鈴絃

「そこはハッキリしとけよ……………」

鮮血

「さて、今回は黄金のイメージＣＶを募集しますね。」
応募して下さいと助かります。」

鈴絃

「いい加減、影晶も肩身が狭いだろうなあ……………」。
男も出してやれよ。」

鮮血

「じゃあ、それも聞こう。
皆様、影晶の持ち物が擬人化する際、【男を増やした方が良い】
でしょうか？」

それとも、【女だけでOK!】でしょうか？
出来れば、意見を窺いたく思います。」

鈴絃

「まあ、アイツの事だから、女だけでもふしだらな事はしないだろうな。」

鮮血

「そうだね。
ハーレムみたいだけど、どっちかと言うと【世話をする】って使命感の方が強いだろうね。」

夜宵

「では、次回もお楽しみに。」

第9話 「影晶と夜宵」？（前書き）

鮮血

「更新を長らく止めてしまつて申し訳ありません。
実は、この話だけデータが……………」

影晶

「なんとか、古いデータを見つけ出したから良かったですけど……
……」

夜宵

「でも、まだこの先の展開は白紙なんだよね？」

影晶

「らしいね」

夜宵

「大丈夫……………なのかな？」

影晶

「うーん……………」

鮮血

「分かん」

夜宵・影晶

「「ダメじゃないですか！」」

第9話 「影晶と夜宵」？」

「テストを返すぞ。」

テスト期間を終えて、それらが採点されて返された。

50音順に教壇まで行き、テストを受け取る生徒達。

嬉しそうにガッツポーズを取る者。

やっぱり赤点だったなど、予想通りの結果に笑っている者。

予想外の点数に、肩を落とす者。

様々な反応が見られる中、影晶の点数はと言つと――

「普通……だな。」

「見ないでよ!？」

—— 鈴絃に横から盗み見られていた。

「気にするなよ。」

どうせ見せる気だったんだろ？」

「それはそうだけど……………」

溜息をついて、自分の席に戻る。

「鈴絃はどうだったの？」

「いつも通り。」

「8割以上……………」

羨ましいなあ……………」

「影晶だって、それくらいに近いだろ。」

「まあ、そうだけだね。」

頃合いを見計らって、鈴絃も自分の席に戻って行った。

それとすれ違いに、夜宵が戻ってきた。

「夜宵はどうだった？」

「影晶と同じ点数だったよ。」

苦笑する夜宵に釣られて、影晶も苦笑いした。

教師が黒板に正答と解説を書き始めたのを見て、影晶と夜宵も赤ペンを手に取る。

「影晶さん、平均点より上ですね。」

すると、筆箱の中から出していた鉛筆——萌が声をかけてきた。

「まあ、なんとかって感じだけどね。」

返事をしないのも悪い気がして、影晶は小声でそう言った。

その時、夜宵は周囲をキョロキョロと見ていた。

「夜宵、どうしたの？」

「え！？ な、なんでもないよ。」

両手を振って誤魔化す夜宵に、影晶は何も言わずに視線を黒板に戻した。

（今の声って……もしかして……。）

だが、夜宵は影晶の方をしばらく見ていた。

やがて頭を振って、黒板に目を移した。

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

第9話 「影晶と夜宵」？

放課後になり、各々が部活や委員会、もしくは帰宅と、様々な行動を取る中、影晶は携帯電話で1度家に電話をかける事にした。

「氷雨と黄金、大丈夫かな？」

そう呟いている間にも、相手呼び出すコール音が何度か鳴り響く。

「もしもし？」

すると、氷雨の声が電話口から聞こえてきた。

「氷雨？」

影晶だけど……。 」

「影晶様。

なんででしょうか？」

「いや、いつもの通り確認だよ。

そっちは大丈夫だった？」

「はい。

「買い物も済ませましたので、特にこれと言ってお願いはありません。」

「分かった。

それじゃあ、今から帰るから。」

「お待ちしており……兄さん、待ってます……ちょっと、黄金！？」

影晶と会話しているのを知ったからか、氷雨から電話を奪って黄金がそう言った。

慌てる氷雨と、未だに話しかけてくる黄金の様子を想像しながら、影晶は苦笑する。

「じゃあ、また後でね。」

電話を切り、それを鞆にしまう。

自宅に向かおうと、その足を昇降口に向ける。

だが――

「紫水くん、ちょっといいかな？」

——クラスメートでもある女子に呼び止められた。

「何？」

「悪いんだけど、図書室で夜宵の手伝いをお願いしていいかな？」

「夜宵の？」

「うん。」

図書委員が本の整理をするのを手伝ってほしいの。
本当は私が手伝う予定だったんだけど……………」

歯切れが悪く、彼女は別の方向に視線を向けた。

そこには、何人かの女生徒がいた。

「部活の大会が近くて、抜けだせないの……………」

「そっか。」

部活に厳しい先生だったわけ……………」

「うん……………」

だからお願い！」

懇願してくる相手に、影晶は特に断る理由も無い為、二つ返事でそれを承諾した。

氷雨に帰りが遅くなる事を伝えてから、彼は図書室に向かった。

「先に夜宵がいると思うんだけど……………」。

中に入り、奥へと足を進めていく。

それなりの広さを持つこの図書室では、少し探すのにも時間がかかったりする。

しかし、早い時間で夜宵を見つける事が出来た。

「夜宵。」

「あれ、影晶？
どうしたの？」

「代理を頼まれたんだけど……………」。

「来てくれてありがとう。」

謝辞を述べて、夜宵は整理の仕方を分かりやすく述べた。

「それじゃあ、早く終わらせちゃおうか。」

「うん。」

その言葉を皮切りに、2人は黙々と、ただひたすらに書物の整理をこなしていった。

「そこまで遅くならなくて良かったね。」

「そうだね。」

夕刻を僅かに過ぎた所で、2人は作業を終えた。

西日は地平線まで沈み切りそうだが、まだギリギリの所で顔を覗かせている。

「ところで、影晶……………」

「うん？」

一緒に帰路についている途中で、夜宵が訊ねてきた。

「影晶に、聞きたい事があるの……………」

いつもと違い、明るさの無い言葉。

不安に彩られたそれは、互いの心を掻き乱しているようだった。

足を止めて、夜宵は俯く。

影晶も無視するはずもなく、立ち止まって夜宵が口を開くのを待った。

「その……変な事かもしれないけど……………」
「しっかりと聞いてくれる？」

「もちろん。」

夜宵の話はちゃんと聞く。

僕がどう思うのかは二の次だよ。」

なるべく話し易くする為に、いつもと変わらぬ声色で返す。

それに安堵してくれたのか、夜宵は顔を上げて、呼吸を整えた。

「影晶、もしかして……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459q/>

ココロヤドル！ 九十九神シンフォニー ♪

2012年1月3日21時53分発行